

阿部 勝太 さん

宮城県石巻市
一般社団法人フィッシュヤーマン・ジャパン
代表理事

格好よく、稼げる、革新的な漁業に 他業種の人たちと連携し成果生む



東日本大震災で10年早く危機が表面化したといわれる東北の漁業を立て直そうと、立ち上がった若手漁師集団。漁業の担い手育成と新たな販路開拓に挑む。漁業を、格好よく稼げる革新的な「新3K」産業に変えるのが使命。他業種の人たちを含め、日本の水産業を盛り上げることに力がかかるすべての人を「フィッシャーマン」と呼び、連携して成果を上げている。

努力が報われる漁業めざす

——東日本大震災から10年です。当時、阿部さんはどこでなにをしていましたか。

阿部 石巻市北上町十三浜という地域の浜でヒジキを煮ていました。3月11日、突然、立ってられない大

きな揺れがきて、近くの崖が崩れるほどでした。津波が来るといので高台に避難しましたが、高さ20メートルの建物にかぶる大きな津波でした。

家族は全員、避難できましたが、自宅、作業場、船などすべて流されました。私は、そのとき着ていた服と携帯電話以外のすべてを失いました。その後は、避難所生活を経て、仮設住宅で5年間暮らしました。

——漁師をやめようとは考えませんでしたか。

阿部 正直考えました。再開するとすれば、膨大な借金をしなければならぬからです。

私は高校を卒業したとき、漁師を継ぐつもりではいましたが、他の世界も見ておきたいと父親に頼み、5年間の約束で都会に出ました。愛知

県内の自動車部品メーカーや仙台市の携帯電話販売会社など、さまざまなか仕事を経験しました。石巻に帰り、漁師になって2年目に震災に遭ったのです。かつて勤めた会社の上司が心配してくれて、「戻って来いよ」と誘いも受けました。

迷いましたが、父親が漁師を続けるというのです。父親一人では、大借金を抱えて苦労することが目に見えていたので、私も漁師を続けることにしました。そして、漁業をやるからには、努力が報われる仕事に変えたい。そう決心しました。

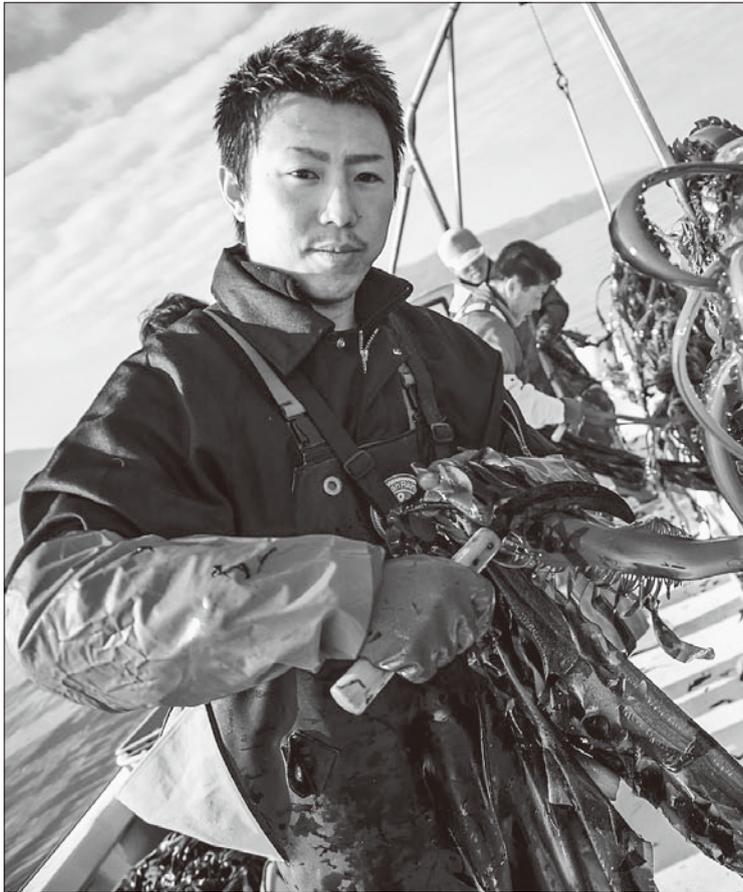
震災を機に仲間づくり

——後にフィッシャーマン・ジャパンを立ち上げるわけですが、どういういきさつがあったのですか。

阿部 日本の漁業は課題が山積していると、震災前から漠然と考えていました。漁獲量は減る一方。若い担い手が少ない。漁師は魚を獲るだけで、売ることを考えない。

震災後、がれきの撤去などに追われて一時期、漁ができなかったこともあり、近隣の漁師仲間と話す機会が増えました。すると、みんな同じ危機感や思いを抱いていました。課題が大きくても、仲間と一緒に取り組めばいいアイデアが浮かぶし、早く解決するのではないかと。

そんなとき、震災復旧の支援で石巻市に来ていたヤフー社員の長谷川琢也さんと出会ったのです。2012年のことでした。「漁業を支援したい」という彼と話して意気投合し、食べてくれる消費者に漁業という仕



ワカメの収穫作業に忙しい阿部勝太さん＝宮城県石巻市北上町十三浜で（フィッシャーマン・ジャパン提供）

事を伝えることが、価値になることを知りました。漁業者だけの集まりでは発想が乏しくなる。異業種の人を巻き込む団体をつくることで、イノベーション（新機軸）が生まれると確信したのです。

——それが「フィッシャーマン」ですね。

阿部 仲間の漁師や長谷川さんらと、こんな話をしました。子どもたちがなりたい職業ランキングで、なぜ漁業は100位以内に入っていないのだろう。漁師という仕事のイメージ

を変えたいために、「フィッシャーマン」という新しい職種を創ることにしよう、と。

魚を獲り育てる漁師はもちろん、加工する人、流通に携わる人、水産物を料理し売る人、情報を収集し発信する人、水産業にかかわる多種多様な人すべてを「フィッシャーマン」と呼ぶことにしたのです。そして、連携するフィッシャーマンを、設立10年目の24年までに1000人に増やすビジョンを掲げました。

——いまは何人になりましたか？

阿部 漁師になりたい人や、われわれの活動に共感してくれる人もフィッシャーマンですから、すでに1000人を超えていると思います。

漁業を「新3K」の産業に

——フィッシャーマン・ジャパンは、漁業を「新3K」の職業に変えることを使命にしていますね。

阿部 漁業という仕事は、きつい割には収入が少ない。残念ながらそんなイメージが強いです。それを、格好よく、稼げて、革新的な「新3K」

に変え、次世代が継ぎたいと思ってくれる未来の水産業を創るのが、私たちのミッションです。

——「きつい」仕事は、改善できていますか。

阿部 私はワカメやコンブなどを養殖していますが、同じ浜の漁師4人と「浜人」という漁業生産組合をつくっています。昔は、繁忙期には朝の3時半から夜の9時まで働くことがありましたが、いまはシフト勤務制度を導入し、繁忙期でも週に1日は休みを取れるようにしています。閑散期は週休2日です。

——「稼ぐ」ことはできていますか。

阿部 これまで漁師は、獲った魚を港に水揚げすればおしまい。漁師には価格決定権がありませんでした。しかも、魚がどうやって運ばれ、いくらで売られているかも知らない。そこで、スーパーの一角に、獲ったり育てたりした水産物を売るコーナーをつくるなど、顔の見える販売に取り組むことで付加価値を上げています。まだ理想通りにはいっていませんが、手応えは感じています。

また、加工分野にも挑戦しています。「浜人」では、海藻の塩蔵や乾燥、冷凍といった1次加工にとどまっていますが、味付けなどの2次加工についても、業者と連携してやっ

Profile
あべしよた
宮城県石巻市生まれ。35歳。高校卒業後、5年間、仙台、東京などでさまざまな仕事を経験。ワカメ漁師の3代目を継いだ2年目に大震災に遭遇。危機にある水産業を立て直そうと、若手の漁師と他業種の人たち13人でフィッシャーマン・ジャパンを設立。新たな担い手の育成と、付加価値のつく販売先確保に奔走。

Data
一般社団法人フィッシャーマン・ジャパン
2014年、漁師の阿部勝太氏（現代代表理事）とヤフー株式会社社員の長谷川琢也氏（現事務局長）らが呼びかけとなり設立。格好よく、稼げて、革新的な「新3K」という未来の水産業をめざす若手漁師集団。若い担い手の育成と、水産物の新たな販路開拓が主な事業。16年に販売部門を分離し、株式会社フィッシャーマン・ジャパン・マーケティングを設立。

きたいと考えています。

担い手の育成と販路開拓

——フィッシャーマン・ジャパンの事業内容を教えてください。

阿部 大きく、二つの事業に分けられます。漁師を育てる担い手育成事業と、水産物の販売事業です。一般社団法人は2014年に設立しましたが、16年にその販売部門を、株式会社フィッシャーマン・ジャパン・マーケティングに分社化しました。

担い手育成事業は「TRITON PROJEKT」と呼び、水産業に特化した求人サイトで漁師になりたい若者を募っています。「トリトン」とは海の神の子という意味です。過去5年間に45人を受け入れました。

魚を獲りたいのか、カキなどの養殖をしたいのか希望を聞き、「親方」となる漁師さんの下で修業してもらいます。そのうち27人が現在も漁師として働いています。

応募者の半分は東北以外からで、首都圏はもろん西は岡山県から来ています。移住してくるので、新人フィッシャーマンの住まいとして、浜にある空き家を改修したシェアハウスを用意しています。ここは彼らと、地域の人たちや同業者たちとの交流の場にもなっています。自主事

業として始めましたが、後に石巻市が行政として取り組んでくれることになり、いまでは市の事業分を含め、全部で7カ所を運営しています。

これとは別に、1泊2日で漁業を体験してもらう「漁師学校」を年に1、2回開いています。いわば「海の寺子屋」で、これをきっかけに漁師になった若者もいます。

さらに、地元の水産加工会社の組織づくりの手伝いもしています。働きやすい環境づくりについて経営者に働きかけたり、新人社員向けに研修をしたりしています。地域の水産加工会社全体の人事部のような役割を担えたらと思っています。

東京・中野に直営の居酒屋

——販売部門を担う株式会社は、どんな仕事をしているのですか。

阿部 港に水揚げしたらおしまいという売り方ではなく、自分たちが育てた水産物の良さをプロのシェフや消費者にわかってもらうための販路開拓です。われわれの常設の鮮魚コーナーは、宮城県内のイオン数店舗に広がっています。業者を通さず魚を卸しているレストランも全国にあります。

また、生産者の思いをダイレクトに消費者に伝えるライブステージと

して、2016年6月、東京・中野に「宮城漁師酒場魚谷屋」という居酒屋を開業しました。毎月1回、われわれ生産者が交代で店に立ち、自分たちが獲ったり育てたりした水産物について、直接話をしています。店で魚の小売りも始めました。

おかげさまで、黒字営業を続けてきましたが、緊急事態宣言で、昨年は半年間、今年は年初から休業を余儀なくされました。残念です。

さらに、輸出事業にも乗り出しています。仙台空港が16年に民営化したのを機に、東北の豊かな食文化を世界に発信するため、協同組合を立ち上げました。水産物だけでなく東北産の農産物の輸出にも取り組む地域商社です。われわれがその事務局を担っています。昨年10月からは、石巻市の輸出協議会の事務局の手伝いもしています。

常に挑戦し続ける団体に

——今後、どんな活動をしていきたいですか。

阿部 大震災に遭って、他の地域より10年早く地方の課題が浮き彫りになった東北から漁業を改革していかなければ、日本の水産業全体が衰退してしまうという危機感から立ち上げたのがわれわれの団体です。名称

に「ジャパン」とつけたのは、日本全体の水産業を盛り上げたいからです。常に挑戦している姿を、今後も全国の漁師たちに見せていきたい。挑戦したくても、縛りがきつくて挫折しかけている漁師が全国にたくさんいると思う。こんな変わったやり方で挑戦している団体があるんだということを知ってもらいたい。

うれしいことに、われわれの活動に共感してくれる漁師たちが、全国各地に出てきています。北海道の尻島では、若い漁師団体が担い手育成事業を始め、福岡県北九州市の藍島では、漁師団体が一本釣りのサワラのブランド化に挑戦しています。自分たちの仕事に誇りを持ち、地域の漁業をもっとよくしていこうという漁師さんが一人でも増えたらいいなと思っています。

——お子さんが漁業を継ぎたいと言ったらどうしますか。

阿部 小学5年生を頭に子どもが3人いて、漁業に興味を持っているようです。親として継いでほしいという思いはありますが、子どもの自由にさせたい。子どもが「継ぎたい」と言ったときに、「そうか、頑張れば稼げるよ」と自信をもって言ってもらえる仕事にしたいですね。

(ジャーナリスト 村田泰夫)